

2020.10.11 年間第 28 主日

## オンライン「神の国のうたげ」

マタイ福音書 22:1-14

(そのとき、イエスは祭司や民の長老たちに) たとえを用いて語られた。

「天の国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている。王は家来たちを送り、婚宴に招いておいた人々を呼ばせたが、来ようとしなかった。そこでまた、次のように言って、別の家来たちを使いに出した。『招いておいた人々にこう言いなさい。「食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、婚宴においでください。」』しかし、人々はそれを無視し、一人は畑に、一人は商売に出かけ、また、他の人々は王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまった。そこで、王は怒り、軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。そして、家来たちに言った。『婚宴の用意はできているが、招いておいた人々は、ふさわしくなかった。だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。』そこで、家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになった。」

王が客を見ようと入って来ると、婚礼の礼服を着ていない者が一人いた。王は、『友よ、どうして礼服を着ないでここに入ってきたのか』と言った。この者が黙っていると、王は側近の者たちに言った。『この男の手足を縛って、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。」

説教

きょうの福音のたとえの解き明かしは長い説教の歴史の中でだいたいできあがっています。

- 1.王子のための婚宴は神の国の完成のたとえです。
- 2.最初に送られた家来は旧約の預言者たちです。

3.招かれても来なかった人々は旧約預言者（エリアやイザヤなど）を受け入れなかったユダヤ人の歴史を指しています。福音書本文ではサラッと2行で終わります。

4.次に送られた家来たちは十二使徒や初代教会の宣教者たちです。

5.畑に行く人や商売に行く人、またほかの人々は王の家来を殺します。彼らはキリスト教に改宗しなかったユダヤ教ユダヤ人たちのたとえです。

6.王の怒りで町が焼かれるとは西暦70年ごろにおきたエルサレムの陥落です。歴史的にはユダヤ国家の歴史はここで終わり、1945年世界大戦後のイスラエル建国まで途絶えることになりました。

7.最後に指示を受ける家来とは異邦人宣教者、異邦人教会のことです。

8.婚宴は客でいっぱいになった、とは異邦人教会が満席になったことを指しています。

9.礼服を着ていないので王の怒りにふれ、外に放り出されるたとは現在でいえばキリスト教福音原理主義のスタイルです。

極端に言い切ってしまうと、神の偉大な計画は御子イエスが地上に現れ、その生涯において完結しました。婚宴の準備はととのっていて、あとは婚宴の席を埋める出席者の問題になっているともいえます。神の視点で見れば、2020年の今でもふさわしい出席者で席は埋まっていないようで婚宴は始まりません。

だれでもいいから連れてこいと命令されて善人、悪人、だれかれ構わず招待され婚宴の席につき、宴会は始まりました。これはマタイ13章24節以下の毒麦のたとえを思わせる内容です。それは毒麦は収穫のときに焼かれるから今は気にするな、無理に引っっこ抜くといい麦までぬけちゃうから、というたとえでした。また、礼服を着ていない人はそとに放り出される。この礼服を着ていない人は、油を買いに外にでた5人のおとめを連想させます。（マタ

イ25章1節以下) 10人のおとめのうち、5人は賢く、5人は愚かだといひます。あぶらを余分に用意していない5人のことを愚かなおとめといひます。あわてて夜遅く油を買いに外に出た5人は婚宴から締め出しをくらってしまうという様子が描かれます。

悪人でも準備万端で礼服を着てちゃんとした身なりをしていれば婚宴を続けることができ、善人でもリボンを取りに家に戻ったウツカリお嬢さんは締め出されてしまうのでしょうか。

礼服着用のドレスコードはパウロ流に言えば「キリストを着なさい」「新しい人を身につけなさい」となります。

**洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。**

**ガラテア3:27**

**造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するので  
す。コロサイ3:10**

ガラテア教会は、そしてコロサイ教会も現在のトルコ共和国にありました。トルコにあり、そこに暮らす人たちの教会ですからユダヤ人にとっては異邦人教会です。ゴリゴリのユダヤ人からみればへんな格好(ユダヤ風礼服未着用)をしている人たちだったのかもしれませんが。パウロはうまいこといって原理的なユダヤ人キリスト教徒と異邦人キリスト教徒の融和を企てたのでしよう。

ずいぶん前ですが早朝の日曜礼拝に出席したとき、開始直前に飛び込んできた女性がいました。ぼうぼうの髪の毛をニット帽で整え、上着のボタンをかけながら、息も絶え絶えにわたしの隣に着席しました。そして礼拝が終わると早々に駆け出し、たぶん職場へといそいでいきました。わたしは、おばさんはホンモノだよ、白いブラウスにひざ下丈のスカート、ヒールの低いパンプスを履いていなくてもいいんだよ、とその時強く思いました。

コロナ感染予防のためオンライン(リモート)礼拝をおこなう教会も増えてきたと聞きます。セカンドチャーチは設立からリモートの礼拝をおこなって

います。ところで礼拝は神の婚宴の備えと考えることもできます。神の婚宴が行われるとしたら、その場所は地上のどこかの処ではなく、比喩的に言えばオンラインの中、バーチャル世界で行われるのでしょうか。そのための準備が世界的に始まっている予感がします。

---